

青森県立青森南高等学校 小笠原 愛奈

おがさわら まな



今回このような貴重な体験をさせていただき、エネルギーについての知識を蓄えるだけでなく、多くの方と関わっていく中で視野が広くなり内面的に大きく成長することができました。

このレポートでは、大きく4つに分けて振り返っていききたいと思います。

1. 事前研修

11月初旬に第1回事前研修会が行われました。そこで、今回共に参加した仲間と初めて顔を合わせることになるのですが、全員のハイレベルなプレゼンテーションや作業をてきぱきと進める姿に衝撃を受けました。そして、東北電力(株)東通原子力発電所、日本原燃(株)原子燃料サイクル施設への見学は、エネルギーについてほとんど無知だった私にとって吸収することがたくさんあり、少しでも多く情報を取り入れようと必死でした。1月初旬に3日にわたって行われた第2回事前研修会は、プレゼンテーションの手直し、発表の繰り返しでした。たくさんのアドバイスを頂かなかで、自分の意見が迷走することもありました。それと同時に自分が青森県の代表として選ばれたという責任の重さもひしひしと感ずるようになりました。

2. 研修で学んだエネルギー事情

日本、スウェーデン、フランスは各国共通で化石燃料に乏しいです。しかし、スウェーデン・フランスは日本とは異なり、総発電量に占める原子力の割合が一番多くエネルギー自給率も高いです。こういった事情背景にはどのような人々の活躍があるのでしょうか。2つの施設へ見学をしてきました。

《フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵所》

ここでは、国内原子力発電所全基から出る40年分の中・低レベルの放射性廃棄物が処分可能で、発電用だけでなくスウェーデン国内の病院、研究施設で発生したものを含む中・低レベルの放射性廃棄物も全量受け入れしています。また、SKB社で働く男女比率は1：1で、研究者は女性が多いそうです。施設に入った時から女性が多いと感じていたので、日本とは全く異なるのだなと思いました。また、私たちを案内してくださった方が、こんなことをおっしゃっていました。「自分たちが使った分の放射性廃棄物だから次の世代に残せない」。自身の安全面ではなく次世代のことを第一に考えている姿に、自分が今まで使ってきた放射性廃棄物の処理についてどうしなければならないのか、もしくは処理に直接的に関わる仕事に就くべきなのかと考えさせられました。

《オラノ社 ラ・アーク再処理施設》

オラノ社のラ・アーク再処理施設では、現在約300ヘクタールの敷地に社員約4,000人が働くとともに、関係者を含めると約5,000人にのぼるそうです。年間

再処理能力は約1,700トンで、フランス国内に限らず諸外国からの受け入れ分を再処理しています。日本原燃の再処理工場はオラノ社の技術協力を得て建設されており、今でも日本原燃の方が技術を学びにオラノ社へ訪問されるそうです。また、日本では使用済み燃料を水中で処理されるのが普通ですが、ここでは空気中での処理が行われています。これは処理する量が増えたために効率化を図っておこなわれていますが、安全性に特に問題はありません。ここでは男性の方も多数見受けられました。

3. 現地高校生とのエネルギーについての議論

《スウェーデン カテドラル高校》

結論だけ述べるとすれば、最終的に話題になったのは「エネルギーに無関心な今の若者をどう教育していくのか」です。スウェーデンチームの意見は「日本は原子力を続けるべき」でした。これについては、日本チームも賛成が多かったのですが、「水力発電をもっと増やせばいいのでは」という意見については、日本チームの千葉君が「日本では、水が豊富で流れも良いなど水力発電に向いているスポットは建設し尽くされて、これ以上増やすことは難しい」と回答しました。スウェーデンは水力資源に富んでいます。日本はそうではありません。こういった発電方法の発想転換の違いは、やはり住んでいる地域によって違ってくるのだということを目の当たりにしました。

《フランス グリニャール高校》

カテドラル高校との議論よりもお互いに意見交換が止まりませんでした。グリニャール高校の生徒は、エネルギー問題に積極的で専門的な知識を兼ね備えている人が多かったです。そしてここで意外な事実が判明しました。グリニャール高校の生徒のうち54%は、恐怖感や、政府や電力会社が事故が起きた際の対策をとっていないと感じることから原子力発電に反対だということです。フランスは原子力発電を主要としている国なので、半分以上の生徒がこう思っていたことに驚きました。議論の中で「日本国民はもう原子力に対する恐怖はないのか」という質問がありました。これに対し私は「もちろん、原子力は事故が起きたときに莫大な被害をもたらすため恐怖感はあるが、逆にこのまま火力発電を続けて温暖化が進み、動植物絶滅や病原体の拡散が起きることも同じように怖い」と答えました。実際に台風の被害増加や海面上昇はすでに起こっており、将来自分はどのような地球環境にいるのだろうと思うと、どれだけ莫大なりスクがあろうとも原子力発電は必要なのではと思います。白熱した議論は三時間にも及び、名残惜しい形で終わることとなりました。

4. 世界遺産を巡って

この研修でモンサンミッシェルをはじめ、様々な名誉ある場所を訪れました。特に印象的だったのはルーブル美術館です。前日はストライキの影響で行けるか

どうか危うかったのですが、運よく入ることができ、さらに人もあまりいない状態で数々の有名作品の写真を撮りながら、またガイドさんの詳しい解説を聞きながら楽しく鑑賞することができました。

5. おわりに

日本はこれから火力発電を抑えながら原子力を推進し、また再生可能エネルギーの開発にも力を入れるという、火力発電、原子力発電、再生可能エネルギーの3つでエネルギーミックスに転換していくことが大切だと私は考えます。もしこのまま火力発電を続けていけば温暖化はさらに進行してしまいます。もちろん、温暖化の原因には都市開発などもあり、すべての原因が火力発電というわけではありません。しかし、原子力による事故を配慮した安全性をとるか、環境問題に配慮した安全性をとるかはとても難しいことです。その他にも、安定供給、コスト面も重要な要素です。だからこそ、バランスの取れたエネルギーミックスが重要となってくるのです。今の日本は火力発電だけに頼りすぎてしまっています。福島第一原子力発電所の事故から約10年がたとうとしている今、もう一度、原子力発電のデメリットだけでなくメリットを見直してみるべきなのではないでしょうか。

ところで、日本は他国と比べて温暖化対策は、どのようにとられているのでしょうか。若者、いや幅広い年代で環境問題に配慮しながら生活している人はどのくらいいるのでしょうか。フランスの高校生は持論を述べるのは当然、専門的な知識も兼ね備えています。エネルギーや温暖化の問題は自国だけで解決していくものではありません。だからこそ、一人でも多く、視野を広げ行動を起こさなければならないのです。私は帰国後、早速あることを始めました。それはノート代わりに裏紙用紙を使うことです。日常生活には表面だけ使い裏面はまだきれいなのに捨てられていく紙があふれています。温暖化対策のために、何か一つでも自分ができることはないかと考えたときに、この現状に気づき、始めました。効果は小さすぎて温暖化対策に役立つかどうかは確信が持てませんが、自分で考え行動することが一番大切だと思います。これまでは温暖化など気にも留めず中途半端なノートの使い方をしてきた私が、いまこうやって変わることができたのはこの研修のおかげです。メインはエネルギーについて学ぶことでしたが、その背景に必ずついてくる環境問題についても学ぶことができ、さらに自分を変えてくれた、とても素晴らしい研修でした。

この研修にあたり、ともに時間を過ごした仲間とは、いろいろな場面でお互いに支えあえた気がします。そして、たくさんのアドバイス・サポートをくださった青森商工会議所様、東北エネルギー懇談会様にも感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。多くの方の支えのおかげで実のある研修にできたことを忘れず、将来に活かしていきたいと思います。

